

# 金型業界 若きリーダーの戦略

## 事業承継と今後の課題

約半世紀の歴史を持つ企業が多い金型業界。歴史と伝統を重んじながらも、国際競争など厳しい経営環境で勝ち残りを考えれば事業革新は避けて通れない。30代、40代の若きリーダーは、今、何を考え、どう改革しようとしているのか。型技術協会が都内で開いた型技術者会議のパネルディスカッション「若手経営者に訊くー将来を見据えた経営戦略」に参加した3人のトップの発言から、事業承継の課題やビジョンのあり方を探る。

昭和精工（横浜市金沢区）の木田成人副社長は3年前、兄の哲朗社長とともに父から事業を受け継いだ。「下請けにはならない。1社依存は危険。1業種に偏らない。借金をしない」といった経営方針を貫いている。金型づくりで培った技術をベースに、プレス機

# 顧客とともに製品づくり

## 最上インクス

鈴木 滋朗社長



（木田副社長）との危機意識を持ち、行政の支援策の活用にも熱心だ。約4カ月前に就任した最上インクス（京都市右

ノづくりを次世代につなぐたい」と力を込める。同社は薄板金属に特化し、顧客の技術革新を後押しする「ものづくりモールの機能」を企業のコンセプトに据えている。同モデルは問題解決・試作・量産のほか、その中核に「コンシェルジュ（案内役）」として、品質保証や技術など顧客の要望に応えるセンターを置

く考えた。「仕事を待つのではなく顧客とともに製品をつくり出したい」（鈴木社長）という。「技術・サービスを強化し、一般的な型メーカーのイメージから脱皮したい」と意欲的なのは4年前に就任した榎山金型工業（長野県佐久市）の榎山剛士社長。業界全体で海外に仕事が流れていく実態について「日本の不況は従来型でない。モノづくりの中心軸が新興国に移っている」と分析

する。自社が変革しないと事態は好転しないとながらも、現地企業との取引ではなく「困っている海外の日系企業の技術支援やコンサルティングで存在感を出す」（榎山社長）方針。「企業はオンラインワンしか残れない」「事業の集中と選択を」という周囲の声にも「中小は選択肢を絞るとかえってリスクが大きい」（同）と指摘する。討論では、事業承継について榎山氏と鈴木氏が「不況時がスタートだったからこそ、一致団結できた」とする一方、木田氏は「厳しい時でもいいが、本当は好景気の時に承継した方がもっと効果的だろう」と話していた。

## 昭和精工

木田 成人副社長



## 榎山金型工業

榎山 剛士社長



# 5年ごとに新技術開発

# 技術コンサルで存在感

型技術者の未来

いる案件もあり、一部については2011年の市場投入を期待している。を進めている。医療機器メーカーなどの要請を受けたもので、循環器用はルなどの自社製品も手掛ける。医療用事業の10年10月期売上高見込みは4

伊藤鑄造（埼玉県川口市、伊藤之厚社長、048・256・4010）は、産業機械や工作機械を構成する中型部品を主に手がける。「少量多品種が当社の特徴。一品モノも多い」（伊藤社長）。ため自動機などを使わず、手込み方式で鑄造する。手込みは機械込めと比べ職人の経験が生産品質を左右。特に「多品種に対応

## 手込め鑄造

伊藤鑄



型の大きさに合う金枠